

聞名仁教

第 185 号 毎月発行
(発行日) 2026 年 2 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号・番号 17810-7-259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

如来の来現

佐々木蓮磨

親鸞聖人を「如来の来現」と申し上げることがあります。

これは聖人を尊ぶあまり申し上げるのでありますから、別に批評がましいことをいうべきではありませんが、よく考えないと、聖人に対するヒイキのヒキタオシになりかねないのであります。

よく世間では、聖人に関する伝説の中に奇蹟きせき的な話でもあると、すぐにそれをとらえて「聖人はタダビトではない」とか、「如来のご化身である」とか言うのでありますが、これは聖人を尊んでいることに間違いはありませんが、その尊び方のポイントがはずれているために、却って聖人の真価を隠すことになると思います。すべて奇蹟的なことをかっぎ出すと、親鸞以上の奇蹟を現わした人は、古来の高僧の中に数多くあることだと思います。そうすると、如来の来現ということとは、親鸞以外の高

僧にも申し上げねばならぬことになって、親鸞聖人の特異性は隠れることになります。

私が、親鸞聖人を如来の来現であるとするのは、不思議な奇蹟を現わされたからではなく、人間親鸞としては言えないこと、即ち如来如実の言を説かれたからであると見るので、これが最もふさわしい見方ではないかと思えます。

かように申すと、他宗からは「我田引水」であり、「手前ミソ」であるとは非難されるでしょうが、私は親鸞聖人が人間の本性をあばき人間救済の最後の切り札を示して下されたことは、どう考えても人間親鸞の仕事とは考えられないのであります。

人間を如実に知ることは、人間ではできません。なんとすれば、いかに知ったと言っても、知ることを知ることにはできませんから、将来、人間の知識は驚くほど進むでしょうが、依然として分からぬ

ものは、何と言っても人間の心そのものであります。これが人間の盲点とも言えるでしょう。この人間の盲点を破つて人間本来の姿を明確に示して下された親鸞聖人の教えは、どう考えて人間親鸞の胸から現れたものではなく、如来の世界から「聞」の道を通して、人間世界に現われて下された如来如実の教えと仰ぐほかはありません。

親鸞聖人は「善導ひとり仏の正意を明らかにす」と言い、また聖徳太子を観音菩薩と拝み、法然上人を勢至菩薩と崇めておられたのも、おそらくは人間的な尊敬を超えて、如来の顕現として拝んで行かれ

たものと思います。善導大師が第十八願の願文を加減されたことでも、聖徳太子が「ともに凡夫のみ」と、人間

に対する価値批判をなされたことでも、また法然聖人が単純な口称の念仏を絶対の行と判決なされたことでも、親鸞聖人は如来のお指図と仰がれたのではないでしうか。

親鸞教学は、人間的な理性や学解によつて樹立されるものではありません。どこまでも聞法道において法による人間否定から築き上げられる教学でなくてはなりません。蓮如上人は親鸞聖人の御一流は「阿弥陀如来の御掟おんおきて」であるとも、また「仏法は法の威力にてなるなり、威力なくてはなるべからず」とも断言されました。(了)

《春季彼岸会》

三月二十二日(日)

午後二時始まり

法話

念佛寺住職

清沢満之先生に学ぶ

⑩

独立者は常に生死巖頭に立在すべきなり。殺戮餓死、固より覚悟の事たるべし。

既に殺戮餓死を覚悟す。若し衣食あらば、之を受用すべし、尽くれば、従容死に就くべきなり。

而して若し妻子眷属あるものは、先づ彼等の衣食を先にすべし。即ち、我が有る所のものは、我を措いて先づ彼等に給与せよ。其残る所を以て我を被養すべきなり。ただ、我死せば彼等如何にして被養を得ん、と苦慮すること勿れ。此には絶対他力を確信せば足れり。斯大道は決して彼等を捨てざるべし。彼等は如何にかして被養の道を得るに到るべし。若し彼等到底之を得ざらんか、是れ大道彼等に死を命ずるなり。彼等之を甘受すべきなり。ソクラテス氏曰く、我セサリーに行きて不在なりしとき、天、人の慈愛を用いて彼等を被

養しき。今我若し遠き邦に逝かんに、天豈亦彼等を被養せざらんやと。

現代語訳（今村仁司訳）

独立者はつねに生死巖頭に立在すべきである。殺されようと餓死しようと、もとより覚悟の上である。すでに殺戮や餓死を覚悟したとしよう。もし衣食があれば、これを受けとり用いるがよい。衣食が尽きれば従容として死につけばよい。

もし妻子眷属がある人は、なによりも彼らの衣食を自分よりも先とすべきである。すなわち、自分が所有するものは、自分においてまず彼らに与えよ。そうして残ったものをもって自分を養うべきである。とはいえ自分が死んだら彼らをどうして養うたらいのか、と苦慮してはならない。これについては絶対他力の大道を確信すれば十分である。そうなれば大道はけっして彼らを棄てることはあるまい。彼らはどうかして養いの道を見つけることができるだろう。

彼らに死を命じたのである。彼らはこれを甘受すべきなのだ。ソクラテスはこういった。「私がセサリー〔テッサリアのこと〕にいつて留守したとき、天は人の慈愛を用いてわが家族を養わしめた。もしいま私が遠い国に向けて死の旅に出たとしても、天はふたたび彼らを養ってくれないことがあるか」と。

*

このようにいったのは清沢満之師ですが、清沢師が生きた時代は明治時代で、日本が近代国家として産声をあげた時期でした。ですからこのころは青年の様に活気のある時期であって、仏教もかなり盛んだった時代です。こうした中で真理を探究し、真実を求めるという風潮が盛んになって意気軒昂な人たちが沢山でた時代なのです。そういう背景があつて清沢師は真剣に真実を求め真実に生きるべく努力を重ねました。

清沢師は真宗大谷派の僧侶でした。ですのでこうした文章を読むと何か真宗にはあわない、どちらかというところ聖道門的理想主義的な話のように聞こえます。しかし、この文章の内容は決して真宗の教えに反してはいないわけではありません。人はこうあるべきだという姿を示しています。ですので、これを我が身に引き当てて学んでみることは大事なことでだと思います。この文章の通りにできるかできないかは、どうも、こういう生き方、在り方が本当の自由を実現した人（独立者）だということを表わしているのです。これを鏡として、さて自分はどうなっているのかを省みるのです。省みただで真宗の教えを聞くのです。そうすると、いかに自分はこの世の物に依存し、隷属し、不安におびえている人間であるかが知られます。

「凡夫だから煩惱があり、煩惱がとれないのが当たり前」 「むさぼりや怒りの煩惱はしかたない」と、はじめから「宿業の身」だといって居直ってしまします。それゆえ、どうしようもない自分を歎き悲しむことがなく、煩惱だらけの自分だから、それを「なんとかしよう」という意欲も願いももたない。

そうすると、アミダ仏が「そんなお前をヒキウケル」「助からぬ汝をタスケル」というアミダ仏の大悲の言葉聞いても、我が身へのアミダ仏の慈悲は身にこたえないのです。親鸞聖人や法然聖人がアミダ仏の本願を「こんな私のためのお念仏でありましたか」とアミダ仏の大悲心に驚き、「ああ有難い」と感じられたのは、初め天台宗の修行僧として煩惱の無い身になりたて、悟りを開きたい、真実にあいたい、二十年三十年と懸命に真実を求め、とうとういかに修行しても真実が分からない、煩惱はなくならないという、いかに

ともしがたい壁にぶつかって苦しんだからでした。

そういう意味で聖道門の教えはあるべき人間の姿を教え、どういう生き方が真実の生き方であるかを教え、それを求めよと勧める教えです。それがあって、我が身の愚かさ、無力さ、煩惱の深さがかえって知らされるのです。ですから聖道門の教えは大事なのです。

では真宗門徒は聖道門の教えを先に学び修行をしなくてはならないのですか、というと、必ずしもそうではありません。

ただし、今の自分は不安だらけで、このままでは空しい一生を送るしかない、なんとか真実にあいたいと思つて真宗の教えを聞き始めるのです。そうすると救いとは、アミダ仏の撰取不捨の利益をいただくことだと教えられます。そこで、なんとか念仏聞法してアミダ仏の撰取にあいたい、信心を頂きたい、救われたいとなつて真剣に求める。それがそのまま宗祖聖人や

法然聖人と同じ道をたどっていることになるのです。

真実の人生の依り処、本当の安らぎ、まことのアミダ仏を求めようと励んでみるのです。このような念仏聞法の生活を通して「出離の縁なく、助からぬ私」であると実感されてくるのです。

以上の上で、この文章を読んでみたいと思いますが、この文章を文言に沿って一々説明するとかかなり長い文章になりますので、全体的な観点から読んでみます。

まずここで「独立者」というのはどういう人なのかというと、この世に於ける「他者・他物」に依存しない人、当てにしない人、そういう人を独立者といわれるのです。例えば自分の名声を生きがいにする人は、他者からの評判に依存していますので、評判が悪くなるのを怖れます。それは他者に束縛されているので独立者といえません。この世の権力者に依存しへつらう人は、権力者の顔色をいつもうかがい、権力者に自分

がどう扱われるかをいつも気にするようになりますから、権力者に縛られた人です。金銭や財産に必要以上に依存する人は貧乏になることを恐れますから「お金の奴隷」のようになります。健康に過度に依存し「健康が第一だ」という人はいつも病気を恐れ、病気になることや病気が悪化することや不安になります。これは「健康」ということに束縛されているのです。

このようにこの世の都合の良いものに依存し深く執着する人は、依存しているものにいつも束縛され脅されて、精神の自由を失っていますから「独立者」ではないのです。このようにこの世の良きもの価値あるものに寄りかかりすぎますと、いつも不安になります。

これに対して「独立者」はこの世の何ものにも当てにしないし、寄りかからない、そういう自由人のことを仏教ではアールハット(阿羅漢)といいます。いわゆる聖者ですね。

そしてここでこうした独立者になろうとすれば、まず「生死厳頭に立在すべきなり」で、縁があればいつでも死ぬ身であることを自覚することが大事だといわれるのです。

貧窮を怖れるのも病気を怖れるのも権力者を怖れるのも、結局は「死への怖れ」が元です。死をいつでも受容して安んじて死んでいけるようにしておく。そこで、

「殺戮^{さつりく}餓死^{がし}、固^{もと}より覚悟の事たるべし。」で、いつ殺されようとも食えなくなつてのたれ死にしようとも、それはもう覚悟の上であれと清沢師はいわれるのです。

そして、生活問題(食えなくなるという不安)について清沢師は、いよいよ財物が乏しくなりしかも家族があれば、まず自分の家族に衣食を先に与え、その残りで自分を養いなさいといわれる。では家族を養う責任である自分が死んだら、残された家族の生きる糧はどうしたらよいか、といえ、それは如来(絶対他力)にまかせなさい、如来が良

きようにしてください、そういう信仰を持ちなさい、と勧められるのでしよう。

あの偉大なソクラテスは、自分が国家(アテナイ)の命令によつて、辺境の地であるセサリー(テッサリア)に赴任せねばならなくなつた

とき、神の計らいによつて、他の人たちに自分の家族の世話をさせて養つてくださった。私はこれから遠い邦(くに)(死後)に行くことになつたが、どう

して神は残された家族を養つてくださらないことがあろうかと、神を信賴してこの世を終つていった。

そしてそれでも家族が衣食を得られなかつて家族が餓死するとしても、それは如来のはからいであるから、これを甘んじて受け入れるべきである、といわれるのです。

こういうのが清沢師の死生観です。そして生きるも死ぬるも「如来のはからいである」という信仰を持ちなさいといわれ、如来他力を信じて生死の問題、生活不安の問題を解決しなさいと勧められるのであります。

このような清沢満之師の言葉をどう受け取るかというのですが、まず人間はこの世の富や身体や権力などを頼りにし依存すると、それらによって縛られ、おびえ、不安が起こって止まないという点は、実際の自分の人生を考えれば、その通りで不安だらけです。様々なものに執着しているがゆえに、それらによって束縛されている、いわゆる「繫縛の凡夫」が私の姿であることは間違いが無い。

ではその執着を断ち切り、この世の都合良いものに依存する心をなくすることができると、それができない。だからいつまでも阿羅漢のような独立者にはなれず怖れおののいている生死の凡夫、それが私であります。この清沢師の言葉に照らされると自分は不安だらけの愚かな凡夫だと逆に知らされます。

ではこの不安だらけの私には救いはないのかというと、そういう私にアミダ仏は「かわいそうである」と

すでに今ここに私を受け取ってください。不安を始末することができない、そのような私にアミダ仏は「そんなお前だから私は今お前を摂め取っている」と、今ここの私と共にいてくださるのであります。

この「アミダ仏が私とともに居てくださる。抱いていてくださる」ことをお知らせください。南無阿弥陀仏は不安ばかりで不安が取れない私の全体を掴んでくださっていることを知らせてくださるのがお念仏なのです。この南無阿弥陀仏を聞くと、き、「汝の生きるも死ぬるも私のいのちの手の中なのだよ」と知らせてくださる。いわゆる生死（生まれて死ぬ）そのものがアミダ仏の大いなる大悲のいのちの中のいとなみであると、ほかであるが知らされるのです。たとえば、餓死せねばならなくなっても、この大悲のいのちの中でこの世の生を終らせていただくのです。一生、不安煩惱はなくなりません。不安があるまま、

その不安がお念仏を申させてくださるよなき縁となるのです。このお念仏を称え聞いていくことは、不安な人生の底で、アミダ阿弥陀仏のいのちのふところ住まいにしてくださいるのであります。（了）

信心夜話

松並松五郎さんの法歌に、いつも六字と二人が一人この親様を知らなんだ寝るも起きるも

南無阿弥陀仏

とあります。松並さんは南無阿弥陀仏と称え聞く念仏において、「二人が一人」と感じておられる。松並さんの信心が非常に深いのが知れます。アミダ仏と自分が離れていない、アミダ仏と私が一つなのだといわれる。一つだけれども、同時に二人なのであると。アミダ仏と私は不可分不可同なのだという実感、これが信心の智慧から知られる事実なのです。

弥陀の本願を信じる人は「摂取不捨の利益」をいただくのだと『歎異抄』第一章に説かれています。摂取不捨の利益の本身は、「二人が一人」と知らせていただく利益が中心ですね。宗教の信仰とか覚りというのは、それが真実の宗教であれば、神と人、仏と人が、別でありつつ一つであるということを本当に知ることでありましょう。

信心が次第に深まってくというのも、この関係が深まってくことでありましょう。南無阿弥陀仏はアミダ仏が「ここにいます」との仰せであるということ、この意味でしょう。アミダ仏と離れない身になる、なると言うよりも「アミダ仏は私に離れない、一つである」と知ることでありましょう。知ると言っても単に頭で「知りました」という知識ではなく実感であり、信心であります。

いわゆる信後においてもなおお念仏の相続が大事なのは、単に報恩感謝というのにとどまらなくて、アミ

住職雑感

ダ仏と人の交わりがより親しくなっていくからでありましょう。松並さんの念仏生活を聞くとそれが実証されていると感じます。（了）

この一月に衆議院解散、二月の選挙で騒がしくなってきた。最近、驚くことの一つに、私の20代ごろは、若い人で保守党に票を入れるような人は大変少なく、逆に中年は圧倒的に保守党に票を投じていた。ところが最近逆で、高齢者はむしろ革新系に票を投じる人が多く、二十・三十代は圧倒的に今の保守党支持といわれている。なぜかよく分からない。日本を経済的にも軍事的にも強い国にするというのが今の政府与党の考えだという。そうなるとお隣の韓国や台湾のように徴兵制になくては予算を増やすだけでは無理であり、今後の日本の若者は兵役にくく可能性が十分あり得る。戦争には勝者も敗者もない。どちらも大きなダメージをうけ悲惨である。防衛は大事であるが、戦争に勝つ力を持つことよりも、「共に平和に生きる」思想・信念を世界に広めていくことが一番大事だと思う。